

門首挨拶

「真宗本廟お待ち受け大会・本廟創立七百五十年記念大会」にあたり、皆さまにご挨拶を申し上げます。

本日、こうしてインターネットを活用いたしまして、全世界の皆さまと共に、お待ち受け大会を挙行し、2023年の慶讃法要に向けて、大いなる一步を踏み出すことができましたことに深い喜びを感じております。

私たちは、この一年、新型コロナウイルスの感染拡大による様々な困難と試練に直面してきました。多くの方がお亡くなりになり、大切な方を失われた皆さまのお悲しみもいかばかりかと思えます。ここに心よりお見舞いを申し上げます。

未だ終息の見えない新型コロナウイルスの猛威は、世界中に深刻な影響を及ぼし、時代は大きな転換期を迎えました。私たちは、この時代に、いよいよ2023年の慶讃法要をお迎えする準備を進めていく、大切な時をいただいたこととなります。

ようやく日本におきましても、コロナウイルスのワクチン接種が始まりました。衆知を尽くした取り組みによって、今回の世界的大流行が収束し、コロナウイルスの感染を恐れることのない日常が戻ってくることを期待しております。

本日のお待ち受け大会では、あらためて、私たち一人ひとりがどのような姿勢で慶讃法要をお迎えするのかを確かめる大切な機縁を頂きました。宗祖親鸞聖人がこの世に誕生され、その求道の生涯を尽して『顕浄土真実教行証文類』を顕される事が無かったならば、私たちに本願念仏のみ教えが届くことはありませんでした。また、宗祖が浄土の真宗を開いてくだされなかったならば、私は生きるべき方向を見失っていたであろうことを思います。

冒頭に宗務総長が申された通り、本年6月11日は、宗門の最高規範である「宗憲」が現在のかたちに全面改正されてから40年目の節目となります。同朋会運動と教団問題を通して生み出された「宗憲」には、「立教開宗の精神と宗門存立の本義を現代に顕現し、宗門が荷負する大いなる使命を果すこと」が力強く誓われています。慶讃法要に向けて、はからずも、この尊いご縁を賜りました一人として、宗憲の誓いを実現していく歩みに微力を尽くしてまいります。

そして、現在の危機を正法弘通の転機と受け止め、厳しいこの状況下にあって、本願念仏のみ教えに「人と生まれた意味」を丁寧にたずねてまいります。その営みが広く一人ひとりに伝播し、2023年には、あまねく世界中の人々と共に慶讃法要の意義を確かめられることを願いたします。

就任以来、本日ご参加の皆さま、インターネット配信をとおしてご視聴いただいている皆さまと広く接することを願ってまいりました。一日も早く、ここ真宗本廟、東本願寺で再会し、共に聞法できる日が来ることを心待ちにしています。

本日は、ようこそご参加くださいました。